

学カフォローアップ校		
小学校名	学級数	児童数
北広島町立壬生小学校	9	136名

(R0211.1現在で記入)

1 指導上の課題

昨年度の学力調査及び質問紙調査から、学力や学習意欲について、次のような課題が明らかになった。

(1) 学力について

- 全国学力・学習状況調査における国語科正答率40%未満の児童の割合を県平均と比較すると、平成30年度は-0.2ポイントだったが、令和元年度は+5.3ポイントとなり、20.6%だった。
- 同調査の選択式の問題の正答率は、国語科で7.8ポイント、算数科で5.4ポイント、全国を下回った。

(2) 学習意欲について

- 令和元年度の学習意欲に関する児童質問紙では、肯定度合(よく=100 大体=66.6 あまり=33.3 全く=0)として換算した値が最も低かった項目は、「人と意見が違うときでも、自分の考えを言うことができる。」で、73点だった。平成30年度の62点より向上しているものの、自分の考えに自信を持って積極的に伝えることは、十分できていないことが分かった。
- 「友達と話し合うなどして、自分の考えを深めたり、広げたりしている。」については、学力に課題の大きい児童の肯定感が低く、全校平均でも昨年度からの伸びが小さかった。その時間の学習課題について、授業の中で自分の考えや疑問を十分にもつことができないため、仲間との対話を通した学びにつながらないのではないかと考えられる。
- 「やりなさいと言われなくても、自分から進んで勉強している。」についても、昨年度からの伸びが小さかった。家庭学習の習慣については定着しているものの、自分で考え、進んで行う自主学習については、全学年において十分に取組めていない。家庭学習が形式的になっており、学力の向上や学習の有用感につながるものになっていないと考えられる。

2 研究の概要

(1) 研究テーマ及び研究のねらい

○研究テーマ

仲間と協力して、課題解決に意欲的に取り組む児童の育成
～授業のユニバーサルデザイン化と

授業に生かす家庭学習の推進を通して～

○研究のねらい

学校教育目標「～自分が好き！仲間が大切！ふるさとが自慢～目標をめざし仲間と協力し努力を楽しむ子の育成」や本事業の趣旨、学校や児童の実態等を踏まえ、上のように研究主題を設定した。

全員が自分の考えや疑問をもとに見通しを持ち、仲間との対話に参加し、教科の見方・考え方を身に付けていくことができるように、次の2点に重点を置いて、改善を図っていくこととした。

- 「授業のユニバーサルデザイン化」を図り、学習に大きな課題のある児童を含む全員にとって、参加と理解がしやすい授業となるようにする。
- 授業に生かす家庭学習の仕方について、各学年の発達段階や個の実態に応じた指導の充実を図り、児童自ら、自分に合った内容や方法を自分で選択しながら、次の授業につながる家庭学習ができるようにする。

(2) 取組について

【各学年の取組】

全校で取り組んだ内容

①「授業のユニバーサルデザイン化」

授業のユニバーサルデザイン化の3要素である焦点化・視覚化・共有化の視点を踏まえ、「選択肢を作る」「かくす」「間違える」などのしかけで教材の安定を崩し、学習に大きな課題のある児童を含む全員が、教師がねらいとしているところに注目し、考えたくなり、話したくなり、参加できる授業、わかる・できる授業をデザインする。

壬生小学校 ユニバーサルデザイン化授業モデル

これまでの授業

形態	学習段階	めざす子どもの姿	←←←	気になるあの子の姿	学習段階	形態
全体	既習・既得	うん、わかる。できる。	教材のしかけ	心ーん。	問題提示	全体
	スレ・妨げ課題(問いの生み出し)	ええ、ちがう。おかしい。どうするん。	①選択肢 ②かくす ③間違える など	へ?なにをするん。 なんでするん。	課題把握	
↓	解決の見通し活動の見通し	お、もしかして。たぶん。やるぞ!オー!	↓	ほとんどわからん。	自力解決	個
	教科の見方・考え方の共有	おお!できた。わかった。おしえて。おしえて。おもしろい。	UD化の三要素	ポーっとしてきた。	練り上げ	
↓	練習	おお、わかる。できる。	・焦点化(シンプル) ・視覚化(ビジュアル) ・共有化(シェア)	は?知らんがな。 はあ、そうですか。	まとめ	↓小集団
	まとめ	ああ、たしかに。なるほど。あ!それなら	←←←	ハー、できん。	練習	
↓	振り返り	いいね。いえでも、やってみる。	←←←	ひー、もうやだ。やりたくない。	振り返り	↓全体

「壬生小学校 ユニバーサルデザイン化授業モデル」

②授業に生かす家庭学習の推進

家庭学習で、ワークシートなどを使って意図的な予習や復習に取り組みませ、授業で使ったり、授業で学んだことを使ったりするようにする。

低学年からでもノートを使って自主的にできる予習・復習として、「予習クイズ作り」「復習クイズ作り」の手引きを作り、取り組ませる。

予習用のワークシート

「予習クイズ作り」の手引き(1・2年用)

【個に応じた指導の充実】

- ①学習意欲の喚起や、課題解決への動機付けにつながるように、単元の構成や課題の設定を工夫・改善する。
- ②課題の把握や解決の見通しの際に、既習事項をできるように、授業における既習の確かめ方や掲示の仕方を工夫・改善する。
- ③実感を伴った気付きや理解を促すために、ワークシートや教材・教具を工夫し、具体物操作や比較などの数学的活動を充実させる。
- ④個別の学力課題を克服し、学びに向かう力を伸ばすために、学力補完体制を確立し、指導と評価を工夫・改善する。

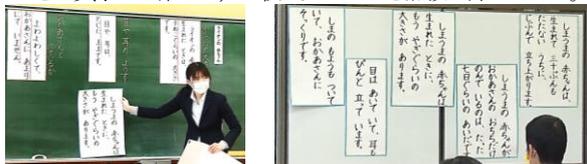
3 実践事例

【各学年の取組】

(1) 授業のユニバーサルデザイン化

単元：第1学年 国語科「比べてよう どうぶつの赤ちゃん」
 内容：ライオンとシマウマの生まれたばかりの様子を、比べながら読む。

- ①ライオンの生まれたばかりの様子については、「大きさ」「目や耳の様子」「お母さんとの比較」が、どこにどう書いてあるかを全員学びで確かめ、3枚の文カードを黒板上部に並べた。



「間違える」しだけ：活動への見通しも持てる工夫 「過大な選択肢を示す」しだけ：しっかり読んで判断させる工夫

- ②T「シマウマのカードも用意したけど、順番がバラバラにならなくなって分からなくなりました。」

C「え？5枚もある。関係ないのも入ってるよ。」

T「ここかなあ。(違う観点のカードを間違えて貼る。)」

C「先生、そこじゃないよ。それ大きさのことじゃないよ。」

- ③T「ライオンとシマウマを比べられるように、カードを選んで正しく並べてくれるかな。」

板書と同じ構造のワークシートと、貼ってはがせるのを塗ったシマウマの文カードを配り、自力で並べさせた。



ねらいとする「比べて読むこと」に、どの子も専念できる工夫

分からなかったところもペアで解決

- ④ペアとの対話活動で、どのように並べたかを確かめ合わせてから、全体発表につなげた。

- ⑤「子ねごらい」「やぎごらい」や「目や耳は、とじたまま」「目はあいていて、耳もびんと立っている」などの対比については、実物大の写真を見せたり動作化させたりして、言葉とイメージがつながるように工夫しながら比べさせた。

(2) 授業に生かす家庭学習

単元：第3学年 算数科「あまりのあるわり算」
 内容：商や余りの意味に着目し、問題に応じて商や余りを処理する。

- ①第1時の予習として、「猛獣狩りに行こうよ」の場面で、〇人組がいくつできるかを調べる問題に取り組み、気付いたことを記述させた。「猛獣狩りは、わり算ということが分かった。」「2年生24人とぴったり(分けられること)が多いけど、3年生19人とぴったりがないも」などの気づきを授業で取り上げ、余りのあるわり算の導入とした。

- ②第2時の予習として、 $13 \div 4$ を「2あまり5」としたオリジナル算数キャラクター「もんきちくん」のために、アドバンスとして図と答えを書かせた。授業は、自分が考えた図と答えの理由を説明し合う活動から始め、余りと除数の大きさの関係を理解することにつなげた。

- ③第6時の予習として、「余りを切り上げて答える問題」と「余りを切り捨てて答える問題」を、どちらも教科書より数値が易しく、かつ、同じ式になるようにして作り、比べやすく並べたワークシートに取り組みさせた。ここでももんきちくんの誤答を示し、それぞれ余りのことをどうする問題と言えるかを記述させた。授業では、この記述を短冊にして混ぜたものを示し、どちらの問題のことかを個人、ペア、全体で検討させた。教科書の問題も適用題として出題した。



予習ワークシート③の一部



余りの扱いについての記述を分ける活動

【個に応じた指導の充実】

<別紙様式2「学力に大きな課題がある児童への指導について(効果のあった実践事例)」参照>

4 研究の成果と課題等

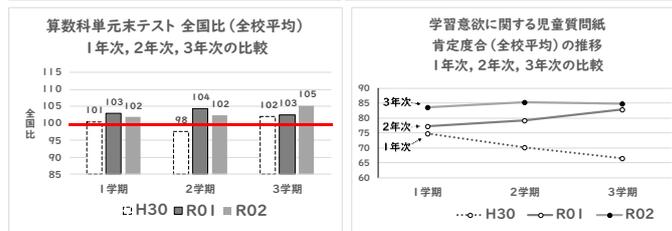
(1) 成果

①学力について

- 令和2年度の標準学力検査(以下「CRT」)の結果を観点別に見ると、国語科、算数科ともに、知識・技能と思考・判断・表現の2観点平均が、全学年で全国を上回った。特に算数科の思考・判断・表現については、全学年で全国を大きく上回り、全国比の全校平均が123と高かった。領域別に見ると、国語科の「書くこと」と算数科の全領域で、全国比の全校平均が110以上と、全国を大きく上回った。
- 令和2年度の算数科単元末テストでは、全国比の全校平均が、全学期で102以上だった。

②学習意欲について

- 令和2年度のCRTでは、国語科、算数科ともに、主体的に学習に取り組む態度の全校平均が全国を上回った。
- 学習意欲についての児童質問紙では、1年次(平成30年度)年平均70点だった肯定度合が、2年次(令和元年度)は80点、3年次(令和2年度)は85点と大きく向上した。特に、「算数の授業は、楽しい」は、1年次の59点から81点になり、「学習を最後までやりとげて、うれしかったことがある」は、69点から88点になった。「学校に行くのは楽しい」も、67点から84点へと大きく向上した。



(2) 課題

①学力について

- 単元末に行う市販テストでは、高学年になるほど「思考・判断・表現」の課題が大きいことが分かった。単元の学習の中で、習熟を図るための適用問題や、活用をつける応用問題に十分に組み込まれる必要がある。

②学習意欲について

- 学習意欲に関する児童質問紙の「人と意見が違うときでも、自分の考えを言うことができる。」については、1年次62点、2年次73点、3年次79点と向上が見られたものの、質問項目中で唯一80点を下回った。「違う考えがあるからこそ、学べる」と思えるように、更なる授業改善が必要である。

(3) 今後の改善方策等

- 〇今年度の重点である「授業のユニバーサルデザイン化」と「授業に生かす家庭学習」を、より普段使いの取組にしていくためにも、来年度から始まるGIGAスクール構想の一人一台端末を有効に活用していくとともに、引き続き、低学年からの学習のつまずきの解消に向け、これまでの研究成果を最大限活用しながら、全教職員で取り組んでいく。